

歌麿を活かしたまちづくり協議会主催講演会

江戸の文学と歌麿

福岡教育大学 菊池庸介

令和五年二月二十三日

於キョクトウとちぎ蔵の街楽習館

◎本日の目的

- ・ 後年の、美人画の名手として名をはせる歌麿にいたるまでの歩みを、文学との関わりから見ていく。
- ・ 江戸時代中期の江戸文学への認識を深める。

資料一、江戸時代における浮世絵（とくに版画）概観（参考・『日本大百科全書』「浮世絵」（小林忠執筆）

○母体は近世風俗画

○初期（明暦三〜宝暦期・一六五七〜一七六四）

- ・ 明暦の大火以降の復興により、江戸の地本問屋による出版が発達、版本の挿絵を描いていた絵師（版下絵師）も増加。菱川師宣の登場。絵入り本から絵本、一枚絵へ。

※基本は墨刷り。手彩色の豪華版もある。後には丹絵、紅絵、漆絵（いずれも筆彩）、紅摺絵（色刷り）も現れる。画題も都市風俗や遊女絵から役者絵、美人画等へ拡大。

○中期（明和期〜寛政期・一七六四〜一八〇一）

- ・ 錦絵の創始。春信、鳥居清長、歌麿によって美人画が発達。

○後期（享和期〜慶応・一八〇一〜一八六八）

- ・ 歌川派の台頭。猪首猫背の姿。画題の多様化（風景画・戯画・横浜絵など）。

資料二、歌麿：…宝暦二年（一七五三）〜八年ぐらいの生、文化三年（一八〇六）没。

※宝暦四年説、宝暦五〜八年説など、諸説あり。

※江戸出生説、川越出生説あり。

※本姓は北川氏、幼名市太郎、のち勇助（介）。

↓江戸時代中期〜後期にかけての生涯。

喜多川歌麿 神田弁慶橋久右衛門町 俗名勇助 名人

はじめは鳥山石燕門人にて狩野家の絵を学ぶ、後男女の風俗を画て絵草紙問屋蔦屋重三郎方に寓居す、錦絵多し。今弁慶橋に住居す。千代男女風俗絵種々工夫して当时双ぶ方なし、名人。『浮世絵類考』

資料三、歌麿の前半生

三の一、幼少期

心に生をうつし筆に骨法を画は画徒にして

今門人歌麿か著す虫中の生を写すは是

心画なり。歌子幼昔物事に細成か。たゝ

戯れに秋津虫を繋きはた／＼蟬蟋を

掌にのせ遊ひて。余念なし。即其生を

むさほらんことを恐れてあまたゝひいましめしに。

今の筆策誠に業の得をかゝやかせしと。

玉虫のつやをうはひ古画を■（辰十木）て。車に向ふ蠟螂の鎌かりて蚯蚓の土を穿ち。そのさひはつをたゝさんと棒ふりのふりよき因に。くらき初心蚩の光りに此道をてらし。蜘蛛の巣の糸口をとけと諸君の狂歌合にたより。彫巧藤一宗か刀は。桜木にもものして其起をことわりせよと乞ふにまかせて

天明七ひつしの冬 鳥山石燕書 『画本虫撰』（天明八年・一七八八刊）跋文）

・ 門人歌麿

・ 幼い頃から物事に細かい（＝繊細、ささいなことにも注意深い、綿密）

・ 虫と（で？）遊ぶのが好き。

・ 師の石燕からは虫遊びをたびたびいましめられた。

← 少年時には鳥山石燕の弟子となっている。

・ 「少年石要」署名の茄子の絵（俳書『ちよのはる』明和七年・一七七〇刊）

※鳥山石燕：狩野派の町絵師。武者絵や妖怪絵で有名。

三の二、青年期

・ 北川豊章を名乗る。

・ 富本正本『四十八手恋の所訳』下巻表紙絵 安永四年（一七七五）が豊章署名の現存最古とされる。

※正本 浄瑠璃詞章の版本として、浄瑠璃太夫の原本を正しく移したものの意（平凡社『歌舞伎事典』） 浄瑠璃作品は複数の段に分かれるが、全段を収める。一部の段だけ取り出したものを抜本という。

※富本 富本節。安永年間より流行。

・ 一枚絵：豊章のものとしては「初代芳沢いろはのすしや娘おさと」（細判・安永六年（一七七七））他、「荒川太郎まけず市川團十郎」（細判・安永七年）が知られるのみ。

三の三、「歌麿」誕生。

・ （黄表紙）『身貌大通神略縁起』（安永十年（一七八一）刊 志水燕十作 忍岡歌麿画 版元蔦屋重三郎）

・ 安永十年歳旦帖

○ 版元蔦屋重三郎方に身を寄せる（天明中ごろ～後期）

○ 絵入り狂歌本・狂歌絵本の制作

・ 『絵本江戸爵（すずめ）』（天明六年（一七八六））

・ 『画本虫撰』（天明八年（一七八八））

・ 『潮干のつと』（寛政元年（一七八九）） 「自家弑成」の落款

・ 『百千鳥狂歌合』（寛政二年（一七九〇））

○肉筆画「雪月花」のうち「品川の月」制作（天明八年ごろ）

○大首絵の発明（寛政初期）

三の四、後半生

- ・大判美人画の制作（大首絵が有名）
- ・肉筆画「雪月花」のうち「吉原の花」制作（寛政三〜四年ごろ）
- ・肉筆画「女達磨図」制作（寛政二〜五年ごろ）
- ・肉筆画「鍾馗図」「三福神の相撲図」（寛政三〜五年ごろ）
- ・肉筆画「雪月花」のうち「深川の雪」制作（享和二年・一八〇二〜文化三年ごろ）
- ・「太閤五妻洛東遊観之図」を描いた科で手鎖五十日（文化元年・一八〇四）。
- ・文化三年没。

資料四、江戸時代における都市文化の概観

- ・前期は上方（京都、大坂）優勢、後期は江戸で新興文化・文学が盛んに起こる。
- ※後期は決して上方が沈滞化したわけではない。

資料五、江戸時代中期の文化

- ・「文運東漸」
 - ・大陸文化の広い受容・流行
 - ・西洋学問の流入
 - ・「江戸文化」の発生（江戸語、江戸っ子意識、江戸文学の生成）
 - ・高度な「雅俗折衷」文化
- ※「雅俗」：江戸（時代）文化把握の前提
- ↓雅俗が並存しているという視点で文化を捉えることが必要。
- ・「雅」なもの⇨伝統文化、伝統文学、舶来のもの（例 大和絵、平安物語文学、漢文学）
 - ・「俗」なもの⇨新興文化、新興文学、国産のもの（例 浮世絵、江戸時代文学）
 - ・新しいものが古いものにとって代わるわけではない。
 - ・新しいものも、時間を経るにつれて伝統化（⇨「雅」化）する。
 - ・中国から渡来した文化・舶来文化を尊重する。
 - ・伝統的なものも「現役」として行われ、発展もする。

資料六、文学にみる江戸時代概観

- ↓近世中期以降の江戸での動きに注目。
- ※とくに、宝暦〜天明期のレベルが高い。

資料七、江戸時代中・後期（とくに安永・天明期）の「江戸」文学

- 七の一、江戸時代中・後期…
 - ・江戸の町の経済力の充実、江戸時代初期から代々江戸に住む人々の意識形成（江戸っ子
 - ・江戸語）、地方から江戸に流入する人々との交流（武家、商人）、学問文化（蘭学・
- 明清学）の輸入、和学国学の形成。

※絵画に関することでは沈南蘋がもたらす南蘋画（それを受ける南蘋派）、洋風画の輸入

○江戸時代中期の文学状況

・韻文

・和歌 江戸派の確立（加藤千蔭、村田春海）。

・俳諧 芭蕉復興、蕪村、雑俳。

・狂歌 江戸狂歌の発達。大田南畝。

・散文

・小説 新たなジャンルの発生（戯作〈洒落本、黄表紙、前期滑稽本、読本〉）。

七の二、安永・天明江戸文学（文化）のキーパーソン・大田南畝とその仲間たち

・大田南畝（蜀山人、四方赤良、寝惚先生、等々）寛延二年（一七四九）〜文政六年（一八二二）。

※幕府御徒の家に生まれる。少年時より学問好き。

※十五歳のときに、内山賀邸に入門。国学漢学及び漢詩などを学び、狂詩や狂文、狂歌もたしなむ（同門に朱楽菅江、唐衣橘洲也）。明和四年（一七六七）に狂詩集『寝惚先生文集』を刊行。風来山人（平賀源内）が序文。名声を得る。

※明和六年、唐衣橘洲邸での狂歌会に参加（参加者六名。橘洲、東作、赤良と賀邸門下が半数）以降、翌年には江戸狂歌初の狂歌本『明和十五番狂歌合』（写本）が作られる。

↓その後、狂歌の集まりは継続的に行われ、明和九年には十二人にまで増える。

※当時の主立ったメンバー

・四方赤良・唐衣橘洲・朱楽菅江：武士、元木綱・大屋裏住・平秩東作・智恵内子：町人

※安永二年（一七七三）酒上熟寝主催の会：宝合わせの会

※安永三年初午「下町稻荷社三十三番御詠歌」

↓狂歌の会が狂歌を詠むにとどまらなくなり、様々な趣向を凝らした集まりの場となっていく（書画会の開催など）。

↓「遊び」の場。狂名に凝る（例 頭光 浜辺黒人 紀束（きのつかぬ） 芋掘伸正

読人白寿 尻焼猿人）。

↓様々な「会」の人物とも交流。咄の会、音曲の会等々。「通」と呼ばれる人たちも取り込む。

※狂歌人口の加速度的な増加。「連（狂歌グループ）」の形成、「天明調」

・参加型の、開かれた文芸。流行の先端。

※天明三年『万載狂歌集』 南畝が江戸狂歌会の盟主になる。江戸狂歌が詠み捨てのものとなくなる。

・南畝の交流：武家、町人、江戸以外の者と様々。

・尻焼猿人（酒井抱一）、手柄岡持（平沢常富・秋田藩江戸留守居役）、

花道のつらね（五代目市川团十郎）

当時詠まれた狂歌の例（『狂歌才蔵集』より）

・歌冬（やまぶき）

山吹のはながみばかり金いれにみの一つだに無きぞかなしき (四方赤良)

・寄鏝恋 主さんにはぐきもとまで恋のふち人の目貫をかね家の鏝 (尻焼猿人)

・真間紅葉 色かへぬ常着のまゝの紅葉葉は錦にまさる誉なりけり (花道のつらね)

・無常 玉の緒も馬の尾に似てきれぬればあはれこきうの音も聞えず (手柄岡持)

※栃木と南畝：・田畑持麿 (渡辺源左衛門)

天明三年頃作『蜀山人判取帳』にも筆を寄せている。

雪

雪つもる甲斐の

根方を

あし引のやまもと

勘介櫓はく

みゆ

下毛栃木

田畑持麿

この歌は『狂歌才蔵集』(天明七年刊(一七八七))にも入集。

・千鳥 門たゝくしほ風寒き小夜中に貫ひちどりのなく赤子かな

・田家恋 かり庵に伊達こく稲のほゝるがほ妹はしごともし上手なりけり

(いずれも『才蔵集』入集)

※南畝交流圏：・文学発生の場ともなる(黄表紙・洒落本などの戯作⇔通人たちによる戯れ)。

例 黄表紙 安永四年(一七七五)恋川春町『金々先生栄花夢』を始発とする。

※安永から天明、寛政初めにかけての主要な戯作者

恋川春町、朋誠堂喜三二、志水燕十、森羅万象、唐来参和、山東京伝、式亭三馬等々。

↓歌麿、蔦屋重三郎も交流圏に在する(後述)。

・狂歌人口の増加↓質の低下も招く↓南畝も徐々に狂歌に飽きてくる。

・寛政の改革を機に狂歌・戯作から遠ざかる。

七の三、出版界の風雲児、蔦屋重三郎

・寛延三年(一七五〇)江戸新吉原生まれ。幼時に喜多川家に養子。

・青年期には廓内で貸本業を営む。安永三年には吉原細見の改めや卸を、翌年には取り次

ぎを行う。

・安永三年(一七七四)、遊女評判記『一目千本』刊行(蔦屋最初の刊行物)、翌年には吉原細見の刊行を行う。天明三年(一七八三)には独占状態に。

・安定、堅実な経営方法(吉原細見、富本正本、稽古本、往来物等)。

・朋誠堂喜三二との交流。当時の人気戯作者。吉原という場も寄与する。喜三二は安永九年より黄表紙執筆に本腰を入れるが、多くは蔦屋から出す。

・安永六年には吉原大門口に独立店舗を、天明三年には日本橋通油町に店舗を移転。

※通油町：老舗地本問屋が多く並ぶ地域。

・天明元年刊『菊寿草』で南畝が蔦屋刊の黄表紙『見徳一炊夢』（朋誠堂喜三二作・北尾重政画）を高評価し、その礼に南畝のもとを訪れる。

↓南畝の交流圏に入る（自らも狂歌連（吉原連）に入る。狂名蔦唐丸）。

・『蜀山人判取帳』には南畝に狂歌集の編集を約束させる。

才蔵集

吉原細見

新吉原大門口

四方先生 つたや重三郎

板元 狂名蔦のから丸

（蔦屋印）

※『狂歌才蔵集』は天明七年刊行。

・天明三年には蔦屋は狂歌本の刊行を始める（元木綱編『狂歌浜のきさぐさ』）。

・狂歌会のプロデュースも手がける。

・寛政三年（一七九一）、山東京伝の洒落本三部作が取り締まりの対象となり、版元の蔦屋は身代半減の重罪となる。

・寛政九年（一七九七）蔦屋重三郎死去。

※蔦屋重三郎は、安永〜天明期の江戸戯作文化を下支えした総合プロデューサー。

資料八、安永・天明期の歌麿

・北川豊章名で富本正本の挿絵。再販読本の挿絵なども描かされる。

・黄表紙の挿絵デビューは安永七年（一七七八）『通鳧寝子の美女（わざくれ）』。

（当代の人気絵師勝川春章、北尾重政の影響。同世代鳥居清長からも刺激）

※北尾重政「喜多川歌麿は弟子同前也」（『増訂古画備考』）

↓蔦屋と歌麿を結びつけた可能性がある。

※安永十年（一七八一）より蔦屋の作品を手がける（黄表紙『身貌大通人略縁起』）。

↓以降、寛政の改革まで、蔦屋を活動の拠点とする。

※南畝交流圏に身を置く。狂名筆綾丸

・『狂歌知足振』（天明三年四月以降刊）

吉原連

加保茶元成

（中略）

筆の綾丸

（後人の注記）画工歌麿。文化二年五月三日、年五十三。北川勇助（北川市太郎。画工哥

間、後勇助）

蔦のから丸

（リ）吉原。寛政九年五月六日、年四十八。蔦屋重三郎（蔦屋重三郎。喜多川柯里、本姓丸山、書林耕書堂）

他の連

堺丁連：花道のつらね（五代目市川團十郎）、本丁連：手柄岡持（朋誠堂喜三二）、酒上不埒（恋川春町）

・『いたみ諸白』（天明四年 蔦唐丸編 四方赤良序）狂歌仲間大門喜和成の追悼歌集
親しき予が友成の一子喜和成こそ東縁に儀を結てしより、はかなく難波の煙ときへしも、今ハさりし比、暇乞に來りて、予も名残をおしみ、斯なる身とハしらでいゝけんも口おしく、はやくもまめで帰り給ふべしとふかく頼ければ、喜和成
へまめでころ／＼はやくかへりなバ君もころ／＼嬉しかるらんと讀てわかれしが、今日思へバ、はからざる世や 一名哥磨筆綾丸
はからざる身を一生もまめならで氣をうすのめと思ひ切る世に

・喜三二、燕十、京伝ら、当時の黄表紙界の代表作者の戯作の挿絵も手がけるようになる。

※黄表紙の画作は天明年間までに集中する。

※戯文のような文章も書く。

・『身貌大通神略縁起』序

はじまり

是に立せ給ふ神仏ごだ交せ開帳の縁起は。余志南子須錦撰（よしなんしすきんせん）が。馬鹿らしいの木に。通明輝（かゝやか）しを。一生参詣して。是を刻（きざむ）の日は。座敷に紙花降り。廓弾強（すがゝき）の音かまひしく茶肆（ちやや）堀亭（ふなやど）のてうちんは。鳳東紫（ゑどむらさき）の雲ともなり。雨ともなり。終に人／＼おがみんすやうになりける。夫より星霜つもつて。どうしなんしたと言れ。豊さんに筭を投げ給へば。半の占方吉事に仕て。おかさんに登りては。ヲ、こはともの給（たまは）す。もつとこつちへよりなんし。花はじめてひらく。笑ひはじめに。禿があひの返事の長／＼しき。我拙き筆を添へよと。ゑん十かもとめにまかせ。御らんのほどもかゑり見すくわしき事は硯のうみにあつけまいらせ候

めてたくかしく

古々路（こころ）もなかき

うしの初春

忍岡数町遊人

うた磨叙

・『蜀山人判取帳』

口演

此度画工哥磨義と申すり物にて
去ぬる天明二のとし秋忍か岡にて
戯作者の会行いたし候より作者と
さく者の中よく今はみな／＼親身
のことく成候も偏に縁をむすふの神
人／＼うた磨大明神と尊契し
御うやまひ可被下候 以上

四方作者ともへ

〈屏風の版画が貼り込まれる〉

貼り込みの絵に見える名前は、四方赤良、朱楽菅江、市場通笑、芝全交、豊川里舟、岸田杜芳、恋川春町、朋誠堂喜三二、森羅万象、南陀伽柴蘭、山手馬鹿人、烏亭焉馬、志水燕十、伊庭可笑、雲らく斎、田螺金魚、風車 北尾、勝川、鳥居清長

※南陀伽柴蘭は窪俊満(黄山堂)

資料九、歌麿が手がけた挿絵と絵本

(新関公子『歌麿の生涯 写楽を秘めて』(展望社・二〇一九年)掲載の一覧を参考に
して、ジャンルごとに順序を入れ替え、適宜情報追加などを行った。推定年齢は新関氏
による)

明和年間

○絵入俳書『ちよのはる』明和七年(一七七〇) 正月 東柳窓燕志編 版元不詳 四十八
図のうち一図、少年石要画 推定十四歳

安永年間

○富本正本『四十八手恋の所訳』下巻表紙絵 安永四年(一七七五)十一月中村座上演(花
相撲源氏張騰)二段目浄瑠璃 豊章画 版元大黒屋平吉 推定十九歳

○絵本番付『仮名手本忠臣蔵』安永六年(一七七七)八月市村座上演 北川豊章画 版元
不明

○つらね正本『朝比奈のつらね』安永七年(一七七八)二月市村座上演 豊章画 版元和
泉屋権四郎

※つらね…歌舞伎で、主として荒事の主役が花道で、掛詞を多用して述べる長台詞

○長唄正本『大津絵姿花』安永七年 二月市村座上演 豊章画 版元不明

○黄表紙『善光寺御利生／通覺寝子の美女』安永七年刊 黄山堂(窪俊満)作 豊章画
版元伊勢屋惣右衛門

○つらね正本『対面 太神楽』安永八年(一七七九) 二月市村座上演 豊章画 版元和
泉屋権四郎

○読本『古実今物語(童歌古実今物語)』 安永八年正月刊 清涼井蘇来撰 北川豊章画
版元竹川藤兵衛 ※宝暦十一年正月刊の再版

○つらね正本『対面 太神楽のつらね』 安永八年 二月市村座上演 豊章画 版元泉屋
権四郎

○黄表紙『夫れも京都是も東都／見物左衛門』 安永八年刊 松壹舎(西村屋与八)作
北川豊章画 版元西村屋与八

○黄表紙『芸者呼子鳥』 安永八年刊 松泉堂作 北川豊章画 版元西村屋与八

○洒落本『女鬼産』 安永八年刊 米山鼎峨(?)作 豊章画(二図) 版元竹川藤助・
和泉屋幸次郎

○噺本『寿々葉羅井』 安永八年刊 志丈作 豊章画(三図) 版元竹川藤助

○黄表紙『(きつゝい)』 安永九年(一七八〇)刊 松壹舎作 北川書 版元西村与八

○黄表紙『(振袖) 近江八景』 安永九年刊 松壹堂(西村屋与八)作 北川豊章画

版元西村屋与八

○(黄表紙)『身貌大通神略縁起』 安永十年(一七八一) ※四月天明改元) 刊 志水燕十作 忍岡歌麿画 版元蔦屋重三郎 推定二十五歳

○絵入り俳書(墨刷り)『安永十年歳旦帖』 安永十年刊 うた麿画(一図)

天明年間

天明三年(一七八三)

○洒落本『三教色』 唐来参和作 うた麿画(一図) 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『腔多雁取帳』 奈蒔野馬平人(志水燕十)作 忍岡歌麿画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『源平総勘定』 四方山人著 うた麿画 版元蔦屋重三郎

天明四年(一七八四)

○富本正本『春夜障子梅』 一月森田座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎

○富本正本『道行野辺の書置』 八月中村座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『梶原再見二度の賭』 (前年『源平総勘定』の再版)

○黄表紙『年始御礼帖』 四方赤良序 歌麿門人千代女画(歌麿)

○黄表紙『金平子供遊』 四方赤良序 歌麿門人千代女画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『他不知思染井』 小女黒鷲式部作 うた麿画 版元鶴屋喜右衛門

○黄表紙『新田通戦記』 四方門生紀定丸作 うた麿画 版元松村辰右衛門

○黄表紙『従夫以来記』 竹杖為軽作 うた麿画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『亀遊書双昏』 喜三二門人亀遊策 歌麿画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『後編栗の本 太の根』 宿屋飯盛序(前編・北尾政美画) うた麿画 版元蔦屋重三郎

重三郎

天明五年(一七八五)

○黄表紙『莫切自根金生木』 唐来参和作 千代女画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『元利安売鋸案内』 恋川春町戯作 歌麿門人千代女画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『嘘皮初音鼓』 桜川杜芳戯作 喜田川千代女画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『長者の飯食』 恋川好町(鹿都部真顔)作 喜田川歌麿画 版元蔦屋重三郎

○黄表紙『蛸入道佃沖』 喜三二戯作 歌麿画 版元蔦屋重三郎

天明六年(一七八六) 推定三十歳

○絵入り狂歌本(墨刷り)『絵本江戸爵』 朱楽菅江序 都多唐丸編(二十四図) 版元蔦屋重三郎

蔦屋重三郎

天明七年(一七八七)

○富本正本『散残花兒鳥』 正月森田座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎

○富本正本『面影香取衣』 正月森田座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎

○絵入り狂歌本(墨刷り)『絵本詞の花』 宿屋飯盛序 蔦屋重三郎編 喜多川歌麿画 版元蔦屋重三郎

版元蔦屋重三郎

○絵入り文芸書(彩色刷り)『麦生子』 九月刊 武江隠士序 鳥山石燕画(一図)、鳥山石柳女画(一図)、歌麻呂画(一図) 版元蔦屋重三郎

天明八年(一七八八)

○富本正本『源氏再興黄金橋』 十一月市村座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎

- 黄表紙『文武二道万石通』 朋誠堂喜三二作 歌麿門人行麿（新関氏は歌麿と推定）
版元蔦屋重三郎
- 黄表紙『時代世話二挺鼓』 山東京伝作 歌麿門人行麿画（同右） 版元蔦屋重三郎
- 狂歌絵本（彩色刷り）『画本虫撰』（狂歌絵本三部作の一）宿屋飯盛撰 喜多川歌麿筆
版元蔦屋重三郎
- 黄表紙『首尾松見越松／雪女郎八朔』京伝門人山東唐洲作 歌麿画 版元蔦屋重三郎
- 黄表紙『扇蟹目傘轆轤／狂言末広栄』京伝作 うた麿画 版元蔦屋重三郎
- 天明九年（一七八九）※一月二十五日寛政改元
- 絵入り狂歌本（墨刷り）『絵本譬喩節』 頭光序 蔦屋重三郎編 画工喜多川歌麿画
版元蔦屋重三郎 ※寛政九年版存

寛政年間

寛政元年（一七八九）推定三十三歳

- 富本正本『誓文色謂謎』 一月市村座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 富本正本『艷容垣根雪』 四月市村座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 富本正本『花色香嬢娘』 十一月中村座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（彩色刷り）『蘇詞夷』 宿屋飯盛撰 喜多川歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（彩色刷り）『潮干のつと』（狂歌絵本三部作の二）朱棗菅江序 画工喜多川
歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（彩色刷り）『狂月坊』（狂歌絵本雪月花三部作の月に相当） 紀定丸撰序
喜多川歌麿製（豊章之印、歌麻呂印） 版元蔦屋重三郎
 - 黄表紙『嗚呼奇々羅金鶏』山東京伝作 うた麿画 版元蔦屋重三郎
 - 黄表紙『冠言葉七日十二支記』 唐来参和戯作 歌麿画 版元蔦屋重三郎
- 寛政二年（一七九〇）

- 狂歌絵本（墨刷り）『絵本吾妻遊』 奇々羅金鶏編序 喜多川歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（墨刷り）『絵本駿河舞』 奇々羅金鶏編序 喜多川歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（彩色刷り）『銀世界』（狂歌絵本雪月花三部作の雪に相当）宿屋飯盛撰
喜多川歌麿製（豊章印） 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（彩色刷り）『普賢像』（狂歌絵本雪月花三部作の花に相当） 頭光撰序
喜多川歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（彩色刷り）『百千鳥狂歌合』（狂歌絵本三部作の三） 赤松金鶏撰序
画工喜多川歌麿（歌麻呂印） 版元蔦屋重三郎
 - 狂歌絵本（彩色刷り）『百千鳥』 赤松金鶏撰序 喜多川歌麿画 版元蔦屋重三郎
 - 黄表紙『雄長老寿話』 定謹作 うた麿画 版元蔦屋重三郎
 - 黄表紙『太平記吾妻鑑』 玉磨青砥銭』 山東京伝作 うた麿画 版元蔦屋重三郎
 - 黄表紙『忠孝遊仕事』 市場作 うた麿画 版元蔦屋重三郎
 - 黄表紙『本樹真猿浮気噺』 蔦唐丸自作 （喜多川歌麿画・国文研新日本古典籍総合
データベース） 版元蔦屋重三郎
- 寛政六年（一七九四）推定三十八歳
- 狂歌絵本（彩色刷り）『春の色』 桑楊庵（頭光）撰 歌麿画（一図、他、四名各一図）

版元蔦屋重三郎

- 狂歌絵本（墨刷り）『絵本よもぎの島』浅黄裏成編序 喜多川歌麿画 版元蔦屋重三郎
- 黄表紙『夫従以来記』 竹杖為軽作 うた麿画 版元蔦屋重三郎 ※天明四年刊の再刷り

寛政七年（一七九五）

- 富本正本『江戸砂子慶曾我』 一月都座上演 歌麿画 版元蔦屋重三郎
- 狂歌絵本（墨刷り）『江戸紫』 万象亭江戸花住（森島中良）撰 歌麿（一図、他、多数の絵師や戯作者が一首に一図、計四十四首四十四図） 版元不明

寛政八年（一七九六）

- 絵入り狂歌本（墨刷り）『歌麿・道守 晴天闘歌集』 末広正木桂長清編
- 歌麿画（署名あり八図、他に仁義道守画など十九図） 版元蔦屋重三郎

寛政十年（一七九八）

- 狂歌絵本（彩色刷り）『男踏歌』 浅草市人撰 歌麿画（一図、他五人の絵師） 版元蔦屋重三郎 推定四十二歳
- 洒落本『辰巳婦言』 式亭三馬作 口絵一図（彩色刷り） 歌麿筆 版元不明

寛政十一年（一七九九）

- 絵本（彩色刷り）『俳優楽室通』 式亭三馬編著 歌麿筆（二図、他は初代歌川豊国、国政による三十六図） 版元上総屋忠助

○絵本（彩色刷り）『絵本四季花』

四方歌垣真顔序 喜多川歌麿画 版元和泉屋市兵衛

享和年間（一八〇一〜〇四）

- 黄表紙『御詠染長寿小紋』 享和二年刊 山東京伝作 歌麿画 版元蔦屋重三郎 推定四十六歳

○黄表紙『明花春為化』 享和二年刊 戯作内新好作 歌麿画 版元西村屋与八

○黄表紙『聞風耳学問』 享和二年刊 一九作 歌麿画 版元西村屋与八

- 洒落本『契情実之巻』 享和年間（一八〇一〜〇四）刊 井之浦楚登美津作 歌麿筆（挿絵二図） 版元不明

○絵本（彩色刷り）『青楼絵本年中行事』 享和四年（一八〇四）刊 十返舎一九著

江戸絵師喜多川舎紫屋歌麿筆 版元上総屋忠助

※歌麿は、黄表紙を天明五年まで多作し、そこで途切れる。天明八年でまた復活するが、かつてほどではない。

資料十、歌麿が関係した黄表紙（一部）

（黄表紙の梗概は、棚橋正博『黄表紙総覧 前編』『同 中編』（青裳堂書店・一九八六・八九）をもとにしてまとめ直した）

・『通鳧寝子の美女』（黄山堂（窪俊満）作・豊章画・伊勢屋惣右衛門刊・安永七年）

猫又家舗を戸手川高右衛門という閑取が買うが、藤沢の祭礼相撲に呼ばれ留守にした時、猫又が下男下女が食い殺され、遊女に化けて客を呼び込み、だまして金銀を得た。それを聞いた高右衛門は開帳中の善光寺に妖怪退散を願って幟を献上する。その夜夢枕に如來が現れ、仏の力によって猫又を遊女のままの人間にするから、これを抱えるよう告げる。お

告げ通り、女郎店を張ると繁盛する。当時行われた深川八幡での相撲興行、善光寺出開帳、回向院界限の金猫・銀猫と呼ばれた女たちと、時事の話題を当て込む。

・『身貌大通神略縁起』(志水燕十作・歌麿画。葛屋刊・安永十年)

開帳、とんだ霊宝秘宝展覽もの。挿絵は一部しかない(草双紙はすべてが絵)。

・『睦多雁取帳(うそしつかりがんとりちよう)』(奈蒔野馬乎人(志水燕十)作 葛屋刊 天明三年)

序文

此草紙の大意は、雁が飛べば石亀のじだんだと言こく、ついに草本の作はなさねとも葛十が趣向を咄に任せ雁みんなみなさるようにとならば画作ともに初舞台よき御評判に跡の雁か先へ行ば本買ひとらしよ雁／＼のみつものとなして雁首をさげて申上ます

奈蒔野馬乎人

質屋番頭金十郎(馬鹿の金持ちの隠語)が遊女に入れあげ、店の金を使い込んで店を首になり、たが屋、桶の廻りを締めるたが屋になるが、もうけ話を聞き、嘘を筑紫の果ての雁の国に行き、池に凍り付いた雁や鴨を捕るが、腰にくくりつけた雁や鴨が飛び立ち、金十郎も空に連れて行かれ、異国巡りをする。

・『金平子供遊』(四方赤良序 葛屋刊 天明四年)

小石川連中心の歳旦狂歌黄表紙。天明四年には、本書の他、『前編栗の本／大木の生限(はへきは)』(本町連)、『後編栗の本／太の根』(伯楽連)、『年始御礼帳』(四方連)、『早来恵方道』(四方側赤松連)といった歳旦狂歌黄表紙が多数刊行される。いずれも葛屋版。

・『他不知思染』(黒鷲式部作 鶴屋喜右衛門刊 天明四年)

「男作五人雁金(おとこだていつつかりがね)」(雁金五人男)の五人男を山東京伝らに当て込む。染井のつつじ見物のおり、腰元おせいを雁金文七が、おりんをきやんの平兵衛が見初める。おせいに若殿が言い寄るが拒み、おりんもおせいを助けるが、そのため二人は暇を出され、廓勤めをすることになる(おせいは松が屋清川、おりんは銀山と改名)。清川は文七と、銀山は平兵衛となじみ、五人男はそれぞれ相手を身請けしてめでたく話は終わる。

・『狂言末広栄』(山東京伝作 葛屋刊 天明八年)

傘張りの長者祐善の娘お六は要之助と睦まじく暮らす。要之助が歌道をきわめたいと京都に上ったため、恋しく思う一念によってお六の首が京都までのびてしまう。祐善の家にかつて奉公していた雨介がそれを見つけ、これでは要之助も驚くだろうから元の姿に戻すが良いと、首を同道して江戸に向かう。いっぽうお六の胴体は首を尋ねて番頭番兵衛に連れられて京都に向かうところ、途中で首と雨助に出会う。医者平庵の治療によってお六の首は元に戻り、要之助を迎えて大団円となる。

・『聞風耳学問』(十返舎一九作 西村屋与八刊 享和二年)

闇魔王が人間世界の様子を知るため、耳塚の霊を遣わして、世界を廻りいろいろな事を聞き取らせる。人の言うことを聞かない一九は皆に耳を引つ張られ、長耳となる。一九は懲りて、てじま先生の異見を思い出して人の言葉に聞く耳を持つようになり、耳は元に戻る。

・『稗史億説年代記』(式亭三馬作・画。西宮新六刊・享和二年)

草双紙(赤本・黒本青本・黄表紙)の歴史を「鉢かづき姫」の話をういて説明する。また、当時販売された一枚刷りの年代記の形式を借りて、草双紙の歴史を詳細に記す。

◎まとめ

・歌麿にとつて、宝暦、明和、安永、天明と成熟をみせた当時の江戸文化、とりわけ狂歌を含む戯作という文学的営為の中に身を置くこと、そして葛屋との関係のもと習作を重ねるということは、彼の画業を大成させるうえで不可欠な経験であった。

◎余滴

○物語化した歌麿の一例『歌麿名画咄』(弘前市立図書館蔵)

・延文十二年、足利尊氏の御代、都に住む歌麿が旅に出て、奥州北の果て智有郡に来る。岩作という村人から旅の話がせがまれ、鎌倉の会都村の墓所にある並び石の怪異の話をす。石に水を手向け、「何そ敵を討たぬぞや」と三べん呼ぶと「エエ、エエ無念」とうなるとのこと。ひとつの石には「貞節婦おさだが墓」もうひとつには「孝行女おこふが墓」と彫りつけてある。

(土地の老人の話による、会都で夫徳郎の敵討ちをし損ねて死んだおさだ・おこう母子の物語)

歌麿が話し終わった後で、岩作は歌麿に母子の肖像画を描いてもらう。岩作は武器を集めるのが趣味で、刀を持っていたが、その刀は老人の話に出てくる、討たれた夫が所持していた刀であるため、画中の母子が岩作の前に現れ、岩作を敵とねらう。

岩作は歌麿に相談、歌麿は敵の肖像も描くと、夜、画中より母子・敵が現れて敵を討つ。※会都村Ⅱおそらく「えどむら」と読ませ、江戸を当て込んでいると思われる。

◎本講演に際し参照した主な文献

浅野秀剛編『浮世絵ギャラリー16 歌麿の風流』(小学館・二〇〇六)

浮世絵 太田記念美術館編『没後190周年記念 歌麿芸術の再発見』図録(一九九五)

江戸狂歌本選集刊行会編『江戸狂歌本選集』(全十五巻・東京堂出版・一九九八〜二〇〇七)

狩野快庵『狂歌人名辞書』(臨川書店・一九七七復刻版・初版は文行堂・一九二八)

小池正胤・宇田敏彦・中山右尚・棚橋正博編『江戸の戯作絵本(一)〜(続二)』(教養文庫・一九八〇〜一九八五)

小林忠「浮世絵」『日本大百科全書』項目・小学館・一九八五・ジャパンナレッジ参照)
<https://japanknowledge.com/psnl/display/?id=1001000030431>

小林ふみ子『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』(岩波書店・二〇一四)

鈴木重三『改訂増補 絵本と浮世絵 江戸出版文化の考察』(ぺりかん社・二〇一七)

鈴木俊幸『葛屋重三郎』(若草書房・一九九八)

新関公子 『歌麿の生涯 写楽を秘めて』(展望社・二〇一九)
棚橋正博 『黄表紙総覧 前編、中編』(青裳堂書店・一九八六・一九八九)
千葉市立美術館編 『千葉市立美術館開館記念 喜多川歌麿展』 図録(一九九五)
菱岡憲司 『大才子小津久足』(中公選書・二〇二三)
菊池庸介 『歌麿』『画本虫撰』『百千鳥狂歌合』『潮干のつと』(講談社選書メチエ・二〇一八)

※このほか、菊池著に掲載した主要参考文献についても適宜使用している。